

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ウマヅラハギ

学名 *Thamnaconus modestus*

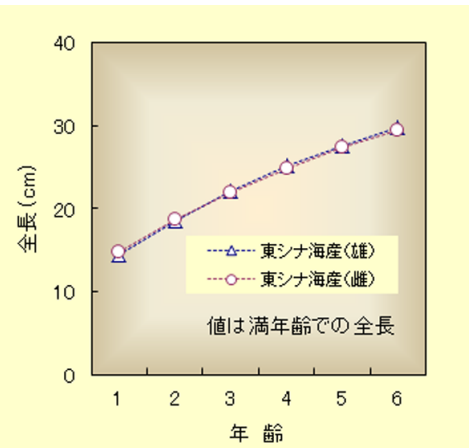
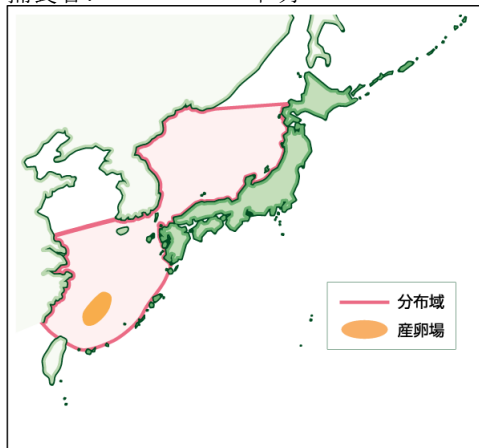
系群名 日本海・東シナ海系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 10歳程度
成熟開始年齢: 雌は2歳(56%)、3歳(53%)、4歳以上(90~100%)、雄は不明
産卵期・産卵場: 4~6月、魚釣島周辺海域、日本・中国・韓国の沿岸
索餌期・索餌場: 8月~翌3月、東シナ海・日本海の沖合域、日本・中国・韓国の沿岸
食性: カイアシ類、貝類、エビ・カニ類、魚類、ヨコエビ類、ウニ類、ヒトデ類、ヒドロ虫類、鉢クラゲ類、珪藻類および紅藻類
捕食者: 不明

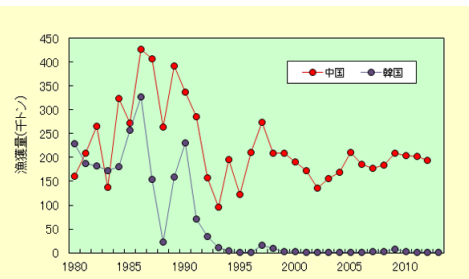
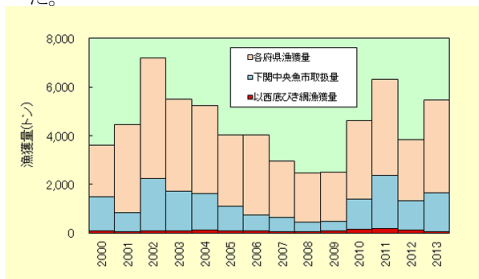


漁業の特徴

主に我が国の沿岸域で定置網、底びき網、刺網等によって漁獲される。

漁獲の動向

我が国の漁獲量は2002年に7,200トンであったが、2008、2009年には2,500トンまで減少した。2010年以降、漁獲量は増加し、2013年は5,500トンであった。中国と韓国のカワハギ類の漁獲量は最盛期(1986年)にはそれぞれ43万トン、33万トンであったが、その後、両国とも減少し、中国では近年20万トン前後、韓国では2013年に1,300トンになった。



資源評価法

漁獲量の情報を収集し、経年変動傾向を検討した。石川県における漁獲量および体長組成を参考にした。また東シナ海陸棚縁辺域の広域において5~6月に着底トロールによる漁獲試験を行い、現存量を推定した(1998~2014年)。

資源状態

東シナ海・日本海における中国と韓国のカワハギ類(主にウマヅラハギ)の漁獲量の推移より、1990年代以降は低水準と考えられる。2013年の我が国の漁獲量は5,500トンと前年比145%で、これは最近10年間では2番目に高い値であったが、最近5年間の推移でみると動向は横ばいである。また、2013年の着底トロール調査の現存量推定値は前年比106%で、最近5年間では3番目の値であった。したがって、資源水準は低位、動向は横ばいと判断した。



管理方策

長期的な資源水準が低位であることから、資源の回復を目指す必要がある。しかし、我が国の漁業が資源全体に与える影響の程度が不明なこと、我が国の漁業の主体である定置網漁業が本種を積極的に漁獲する漁法でないこと等を勘案しつつ、我が国における漁獲量の変動傾向に合わせてABCを算定することが妥当である。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	50百トン	$1.0 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 0.96$	—	—
ABCTarget	40百トン	$0.8 \cdot 1.0 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 0.96$	—	—

コメント

- ABC算定規則2-2) によって、ABCは $\text{ABClimit} = \delta_2 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot \gamma_2$ 、 $\text{ABCTarget} = \text{ABClimit} \cdot \alpha$ で計算した
- γ_2 は、 $\gamma_2 = 1 + k(b/I)$ で計算をし、kは係数(標準値の0.5)、bとは漁獲量の傾きと平均値(直近3年間)である

- δ_2 は我が国の漁業の主体である定置網漁業が本種を積極的に漁獲する漁法でないことを勘案して1.0とした

資源評価のまとめ

- 中国、韓国の漁獲量の推移から、水準は低位
- 我が国の漁獲量の推移および着底トロール調査の現存量推定値から、動向は横ばい

管理方策のまとめ

- 我が国の漁業の主体が定置網であることから、我が国における漁獲量の変動傾向に合わせてABCを算定することが適当である
- 東シナ海および日本海における資源状態の正確な把握には、関係各国の協力が必要である

執筆者: 佐々千由紀・酒井 猛

資源評価は毎年更新されます。